

南加賀の石文化

写真・文 タカヤナギユタカ



小松城本丸天守台石垣(小松高校グラウンド西側)。切込みハギという当時の最新の石垣工法が用いられた。金沢の戸室石、小松の鵜川石という種類の異なる石が美しいパッチワーク風の意匠を作り出している。この上に風流な二重三階の数寄屋造りの櫓(やぐら)があった。

木の文化、石の文化

西洋は「石の文化」、日本は「木の文化」だとよく言われる。日本は国土の約67%が森林で、湿度の多い気候風土に木の家は適していた。そのため日本では、石は建物そのものではなく、脇役、縁の下の力持ちとして城の石垣や川や海の堤防、街道の石畳などに利用されてきた。脇役ではあっても、庭石や石灯籠、石仏、狛犬、鳥居、石垣に見られるように、日本の石文化には日本独特の美意識が反映されている。また、九谷焼など陶磁器の材料となる陶石も日本の石文化の一部と言える。

石川の石としては、金沢城や兼六園で使われている戸室石が有名だが、実は南加賀では金沢よりも多様な石文化を見ることができるのだ。

小松城の天守台は一見の価値あり

江戸時代前期の屈指の名君とされる加賀藩二代藩主、前田利常。小松城はその利常が隠居する城として、一国一城令が制定されているにも関わらず、例外的に許可され築城された。面積は金沢城の倍近く。桃山文化の伝承に力を尽くした利常が心血を注いだ名城であった。この小松城の天守台は、築城技術がピークに達した時期に築かれただけに、精巧に積まれた石垣は見事。直線的に加工した石材をブロック状に積み上げる工法は、石が安定し、高くて急角度の石垣を築くことができ、見た目も洗練されて美しい一方、手間と費用が膨大となるため、徳川将軍家とごく一部の大名しか採用できなかった。

小松城の石垣の重要な部分には良質の金沢の戸室石を用い、そのほかの部分に小松産の鵜川石を使っている。

名城とうたわれた小松城だが、廃藩置県後、城内の建造物は入札によって払い下げられ、土地開発の名目で石垣は崩され、堀は埋められ、由緒ある銘木大樹は伐採された。

小松高校のグラウンドの端に、時代から取り残されたような天守台だが、一見の価値あり。